

## 論文審査の要旨

筆頭著者（学位申請者）氏名

石郷岡 晋也

主論文の題目  
および  
掲載誌・審査委員

題目 Evaluation of Magnifying Colonoscopy in the Diagnosis of Serrated Polyps（鋸歯状病変の診断における大腸拡大内視鏡の有用性）

掲載誌 World Journal of Gastroenterology 2012;18: 4308-4316

主査 田中 逸

副査 高木 正之

副査 月川 賢

[論文の要旨・価値] 大腸ポリープで腺管構造が鋸歯状を呈する大腸鋸歯状病変は病理組織学的に Hyperplastic polyp (HP)、Traditional serrated adenoma (TSA)、Sessile serrated adenomas/polyps (SSA/P) に分類される。TSA と SSA/P は癌化する可能性が知られるが、これらは通常の大腸内視鏡では診断がつかない。申請者は内視鏡的に切除された 118 病変に対して、拡大内視鏡による表面の腺管開口部の形状 (pit pattern) 所見と病理組織的診断との比較検討を行い、拡大内視鏡検査の有用性を検討した。対象は 118 例中、鋸歯状ポリープを呈した 112 例 (HP 23 例、TSA 39 例 (内 1 例が癌併存)、SSA/P 50 例 (内 3 例が癌併存)) である。拡大内視鏡による pit pattern の分類は工藤分類と木村・山野らの亜分類を用いた。その結果、SSA/P は HP や TSA に比して、有意に病変径が大きく、右側結腸に多く、平坦型が多く、ムチンに富み、色調は同色調から白色調のものが多かった。拡大内視鏡の所見では pit が広く拡大している開 II 型が SSA/P に、pit が鋸歯状を呈する鋸 IV 型が TSA に特徴的な所見であった。とくに SSA/P は鋸歯状腺管における陰窩が拡張、不規則に分岐、陰窩底部の水平方向への変形などを起こし、開 II 型に加えて様々な形状の pit pattern の拡大を呈することを見出した。そして開 II 型を呈する場合、SSA/P と判断できる感度は 82%、特異度は 88%であることを示した。本論文は大腸鋸歯状病変の診断に拡大内視鏡が有用である可能性を示すもので、臨床医学的にも価値が高いものと判断された。

[審査概要] 審査は主査と副査で平成 28 年 3 月 9 日に開催された。PC による 20 分の発表は形態写真とイラストを巧みに組み合わせ、理解しやすいよう工夫された内容であった。その後 40 分間の質疑応答が行われたが、数値的、客観的指標による分類の可否、腺管開口と粘液量の関係、SSA/P の自然経過と癌化率、同一病変内での HP、TSA、SSA/P の併存の有無、癌併存例の pit pattern の特徴、内視鏡検査時の切除適応など多くの質問に対して申請者はおおむね的確に回答し、論文発表から現在までの研究の発展と今後の方向性についても明快な考えを述べた。

## 最終試験結果の要旨

[研究能力・専門的学識・外国語（英語）試験等の評価] 英語審査は文献の一部を訳させ、十分な英語読解力があることを確認した。審査全体を通して専門的知識と研究遂行能力の高いことがうかがえ、発表態度と人柄にも好感がもてた。以上から申請者の石郷岡晋也氏は学位授与に値すると考えられた。